



# やなぎっ子

## 「おわれて」・「おう」

校長 萩原 哲哉



「夕焼け小焼けの 赤とんぼ おわれてみたのは いつの日か」（三木露風／詞・山田耕筰／曲）

さわやかな秋風を体で感じながら、西の空の夕焼けを目にすると、自然、この曲が浮かんできます。幼い頃に覚えたので、頭の中の歌詞は、ひらがなです。小学生の頃には、「作者が赤とんぼの気持ちになって、虫取りをする子どもに、追いかけてられている様子を表したもの」と、勝手に解釈していました。

もちろん、これは誤り。「おわれて」は、「追われて」ではなく、「(私が背) 負われて」、つまり子守りをされていた幼い頃の記憶、ということです。

同じように、ひらがなのまま頭に入り、意味を誤解していた例がもう一つ。

「うさぎおいし かのやま こぶなつりし かのかわ（高野辰之／詞・岡野貞一／曲）」文部省唱歌の「ふるさと」です。これも幼い日に、「うさぎ おーいしい」と口ずさんでいたことから、『ウサギがおいしい』だなんて、かわいそうだなあ。」と思っていました。漢字に変換すれば「追いし」、つまり「追いかける」の意味。「ふるさとの野山では。ウサギを追いかけて遊んだり、小川ではフナを釣ったりしていたっけなあ。」という意味になります。

「負う」も「追う」も「おう」という同じ訓で発音します。日本語は漢字が多くある代わりに、発音は100から500程度とされています。これに対して、英語やドイツ語は、文字数が少なく、逆に発音の数が4000から8000もあるとされています(諸説あるようです)。これは文化の違いですので、どちらがよいという話ではありません。自分の母国語である日本語について、「発音の数は少ないが、文字の数は多い」という特徴に、気付くきっかけになれば十分です。



教室ではまだ、以前のような活発な話合いや交流活動は控えていますが、それでも児童が大勢で一緒に学習活動ができるようになりつつあります。ある教室前を通りかかると、漢字を「空書き（教師が空間に鏡文字で書いた漢字の筆跡を、児童が同じように自分の指を動かして筆順通りに漢字を学習すること）」で学習していました。「先生のあとを『おって』書いてね。」の指示。ここではもちろん、教師の指を「追いかける」方の「おう」ですが、なぜかその時、「負う」方、すなわち「これからの時代を、みんなで背負って行ってね。」という意味も同時に浮かんできました。

まもなく一人一台のタブレットが整備されます。人工知能AIの進化も著しいものがあります。そんな中であるからこそ、人間の大きな強みである「よさや美しさを判断すること」を、秋の原風景の中に、童謡の旋律と共に、再発見したいと思います。